

J.LEAGUE NEWS PLUS

Vol.16
30 Sep.2011

サッカーは世界の言葉

～ Jクラブの草の根国際交流～

Jリーグは「国際社会における交流及び親善への貢献」を、その理念の一つとして掲げている。リーグ設立から20年目を迎え、AFCチャンピオンズリーグやFIFAクラブワールドカップでJクラブが活躍するようになり、トップチームは世界の舞台でさまざまな成果を上げつつある。その一方で、草の根レベルの交流に目を向けると、アカデミーの国際試合などの機会は広がりつつあるものの、まだまだ発展の余地があるといえるだろう。

そうした中、アフリカのエチオピアで子どもたちへのサッカー普及活動を行ったベガルタ仙台と、アジア各国の子どもたちとサッカーを通じた交流を長年にわたって行っている浦和レッズの活動を、現地ルポも交えて取材。Jクラブの国際交流の在り方を探った。



J.LEAGUE™ OFFICIAL SPONSORS

Calbee

Canon

KONAMI

AiDEM

Coca-Cola

東京エレクトロン

M

J.LEAGUE™ 100 YEAR
VISION PARTNER

朝日新聞

LEAGUE CUP SPONSOR

ヤマザキナビスコ

SUPER CUP SPONSOR

FUJI Xerox

J.LEAGUE™ OFFICIAL
EQUIPMENT PARTNER

adidas

J.LEAGUE™ OFFICIAL
SUPPLIER

Johnson & Johnson

J.LEAGUE™ OFFICIAL
BROADCASTING PARTNER

スカパー!

SPORTS PROMOTION
PARTNER

OCBC

サッカーは世界の言葉

～Jクラブの草の根国際交流～

ベガルタ仙台

～<現地ルポ>エチオピアの子どもたちとの絆～

エチオピア正教の聖地として知られるラリベラは、

エチオピア北部ラスタ郡の山あいに位置する人口2万5000人ほどの小さな町である。

クリスマスには世界遺産にも登録されている岩窟教会を目指し、

エチオピア中から数十万人という巡礼者が集まつてくる由緒ある巡礼地だ。

2011年1月、そのラリベラにあるサッカー場に、

たくさんの子どもたちの大きな声が響き渡っていた。

サッカー場といつても、

そこは砂利だけではなく大きな石も転がるでこぼこの広場。

パスをしてもラグビーボールのように跳ねてボールは真っすぐ進まず、

大量の砂ぼこりも舞い散る状況で、決してサッカーに適した環境とはいえない。

それでも彼らは、真剣なまなざしで一心不乱にボールを追い掛け、

必死のプレーで何度も何度も相手ゴールへと迫る。

そんな子どもたちの中心に、ベガルタ仙台のジャージをまとった2人の日本人コーチがいた。

衝撃を受けた エチオピアの現実

「エチオピアと聞いた時の第一印象は、幼い頃にテレビで見た“飢餓の国”のイメージだった」と語るのは、ベガルタ仙台育成部でスクールマスターを務める井上和徳コーチだ。エチオピアはアフリカ最古の独立国であり、約8500万人の人口を誇る東アフリカの大國である。しかし、南アフリカやケニアといった近年著しい経済成長を遂げる他国とは異なり、アフリカ大陸の中でも最貧国の一につに数えられ、人々は常に「貧困」と隣り合わせの生活を強いられているのが現状である。

「移動する車窓から見た街の景色

は、アフリカ大陸に初めて来た人間にとてかなり強烈だった」と振り返るのは、ベガルタ仙台育成部でU-10の監督を務める福田直人コーチだ。車線もなく砂ぼこりが巻き上がるでこぼこの道路、扉も窓もないわらぶきの家々、ぼろぼろの布をまといはだしで歩く人々。

車を降りるとすぐにたくさんの子どもたちや母親が「マネー!マネー!」とお金を求めて寄ってくる。そればかりか空港職員までもが持参したサッカーボールに群がり、「一つでいいから俺にくれないか」とねだった。日本とは180度違うエチオピアの現実に、2人はしばし言葉を失った。

しかし、「ベガルタカップ」と銘打たれた大会が開催されているラリベラの

サッカー場に2人を乗せた車が到着した時は、先ほどまでの寂れた景色とは一転して、数百人の子どもたちが笑顔で駆け寄り、まるで大きなお祭りのような雰囲気の中で、遠く日本からやって来たサッカーコーチを歓迎してくれた。

サッカー場には、「僕たちのプレーを見に来てくれてありがとう!」と日本語で書かれた横断幕も掲出され、集まった子どもたちと観客を合わせると数千人の人々で会場はぎっしり埋まっていた。その中にはラリベラ市長やサッカー協会の会長の姿もあり、この小さな町の人口の大半が集まっているのではないかと思うほどの盛り上がりである。

「ベガルタカップ」は今年初めて開



トロフィーを手にした子どもたちは、日が暮れるまでみんなで歌い踊り続けた



サッカー教室に参加した子どもたちには、ベガルタカラーの特製Tシャツとクラブフラッグをプレゼント。Tシャツの製作は地元ラリベラの修道院に依頼した

催され、年齢別に四つのカテゴリーに分けて事前に予選大会を戦い、この日は各カテゴリーの決勝大会が行われた。ベガルタ仙台が各優勝チームに日本から持参したトロフィーやユニフォームを、優秀選手にスパイクなどの賞品を提供する。金色に輝くトロフィーを手にした子どもたちは、まるでワールドカップの優勝チームのように頭上に高く掲げ、大声で歌いながら走り回って喜び合い、会場からは大歓声が沸き上がった。

「気付き」を残していくこと

ベガルタカップの翌日からは、いよいよサッカー教室の開始である。井上、福田両コーチの集合の合図に、子どもたちが駆け寄ってくる。左右別々の靴を履いている子、靴がなくはだしでやって来た子、この日のために友だちからユニフォームを借りてきた子。そして、彼らが抱えていたのは靴下や古着を丸めて作ったサッカーボール。エチオピアのグラウンドには、日本では当たり前にそろうものが、ほとんどそ

ろっていなかった。

日本から持参した本物のサッカーボールを見て、彼らは目を輝かせた。「2人1組の練習では、みんなボールに熱中し過ぎて、こちらの言うことをまったく聞いてくれなかった」と井上コーチは苦笑する。そこでコーチたちは個人練習ではなく、チームごとに楽しめるゲーム形式の練習を多用するプログラムに変更した。「みんなで遊ぶことの楽しさ」を彼らに感じてもらうこと

が大切だと考えたからだ。

サッカーボールの数そのものが少ないエチオピアでは、一つのボールを年長者などの一部の子どもたちが独占して使っているように見えた。前日の「ベガルタカップ」のハーフタイム中に、年上の子どもがボールで遊ぶ様子を、小さな子どもたちが周りでうらやましそうに見ている姿があったからだ。彼らは多くの仲間と一緒に、少ないボールで楽しむ“遊び”方を知らない



サッカー教室では、一つのボールを使って、チームの仲間と一緒にになって楽しめるプログラムを多く取り入れた。初めて体験する練習方法に、子どもたちは興味津々だった

サッカーは世界の言葉

～Jクラブの草の根国際交流～

のだ。

井上コーチと福田コーチは、パス回しゲームやリフティングゲームなどのさまざまな“遊び”の中で、たくさんの仲間とともにボールを蹴り、チームのみんなで協力することの楽しさを子どもたちに感じてほしいと考え、パスする相手の名前を呼ぶことなどをルールにしたゲームを行っていった。実際に子どもたちも一つのボールを使ったさまざまなゲームをみんなで協力して進めていく中で、自然と仲間同士で声を掛け合い、楽しんでプレーできるようになつていった。

ボールやユニフォームといった“モノ”を彼らに届けることも必要な支援ではあるが、こうした少しの“気付き”をエチオピアの子どもたちに残していくことこそが、はるか日本からやってきたコーチたちに求められる一番大切な役割なのではないだろうか。

「また必ず来てね!」「約束だよ!」——。サッカー教室を終えて車に乗り込む2人に、子どもたちは口々にそう呼び掛けた。また再び、ベガルタ仙台のコーチがこの地を訪れるまでの間、



NPO法人フー太郎の森基金
理事長

新妻香織 氏

彼らはこの日覚えたたくさんの“遊び”を基に、みんなで一緒にサッカーを楽しんでくれることだろう。

きっかけは 「エチオピアに縁を」

今回、ベガルタ仙台がエチオピアで子どもたちにサッカー教室を行うきっかけとなったのは、エチオピアで10年以上も植林活動と水資源開発を進めている福島県相馬市のNPO法人「フー太郎の森基金」の活動に賛同したことが始まりだった。

このNPOの新妻香織理事長がエチオピアに初めて渡ったのは、同国が30年にもわたる内戦を終えたばかりの1994年にさかのぼる。ラリベラを訪れた際に、少年たちにいじめられていたふくろうの子どもを買い取つて“フー太郎”と名付け、再び自然に帰すための森を探す旅へと出掛けた。しかし、見渡す限り乾いた大地ばかりで森どころか1本の木さえ生えていない。エチオピアはここ数十年の間に、行き過ぎた農地の拡張や過放牧、燃料確保や生活の足しにするための無計画な森林伐採によって、かつて国土の40%もあった森をわずか4%にまで減らしてしまっていた。木が無いことは豊かな土壌を失い、結果的に水不足から飢餓^{ききやく}を招く。エチオピアの人々は乾季の干上がった川を掘り、わずかににじみ出る泥水をすくって暮らしていた。「フー太郎が安心して帰れる森をつくってあげたい。この国の深刻な水と緑の問題に対して、1本の木を植えることからでも行動していかなければ」という新妻理事長の想いで98年、



サッカー場の入口や街中に手づくりの横断幕が掲げられ、みんなが笑顔で歓迎してくれた

フー太郎の森基金は誕生した。以来、エチオピアの地に植えた木は10年間で約90万本にも上り、四つの緑地公園も造成。また八つのため池と二つの小学校の建設も行った。

基金は特に子どもたちの教育にも力を注いでいる。ラリベラと周辺の三つの小学校内に「環境クラブ」をつくり、子どもたちと一緒に種から苗を育て、1本ずつ丁寧に植林を行う。エチオピアは近年、子どもたちの人口が急激に増加しており、今から彼らにしっかりととした教育を行っていけば、将来的に無謀な伐採などが減り、再びエチオピアの大地に緑が戻ることへつながると考えているからだ。

そんなエチオピアの子どもたちに一番人気のあるスポーツこそが、サッカーなのである。「いつも子どもたちが古着を丸めたボールを楽しそうに蹴っている姿を見て、サッカーを通じて彼らの心に残る活動ができるのではないかと考えていた」と新妻理事長は語る。

そんなある日、こうした想いを巡らせていた理事長の元に1通のメールが届いた。「お元気ですか? フー太郎の森基金はまだ熱心に活動されているようですね。私は現在ベガルタ仙台で働いています。何か一緒に活動できるといいですね」。それは、旧知の仲だったベガルタ仙台事業部の齋藤美和子運営課長からのメールだった。

コーチを海外へ 派遣することの意義

きっかけは偶然だった。2009年5月にベガルタ仙台が福島県営あづま陸上競技場でホームゲームを開催した際に、協力してくれたスタッフの1人がフー太郎の森基金の関係者だった。10年ほど前に新妻理事長と出会い、面識のあった齋藤課長は懐かしい想いを胸にメールを送った。互いの仕事ぶりを報告し合うとともに、新妻理事長からは「エチオピアの子どもたちにボールを贈るなど、サッカーを通じた支援をお願いできないか」という打診を受けた。

齋藤課長は、東ティモールにおいて



ベガルタ仙台
代表取締役社長

白幡 洋一 氏



ベガルタ仙台のサポーターに日本で書いてもらった、エチオピアの子どもへのメッセージが入った紙コップを苗木のポットにして、両コーチは現地で子どもたちと一緒に植林活動も行った
(右:井上和徳コーチ、左:福田直人コーチ)

て学校運営の支援をするNPO活動を自ら進めてきた経験を持つ。「現地に行き、お土産として少年たちにサッカーボールを渡したもの、ある少年がはだしで硬い革のボールを蹴ったためにけがをしてしまった。彼らはけがをしても周りにそれを治療する病院はなく、大変困ったことがあった」と、過去の体験を通して痛感した“指導者の大切さ”を訴えた。そこで、ただ単にボールを贈るのではなく、しっかりと蹴り方や遊び方を教えることができるコーチの派遣を提案し、新妻理事長からも賛同を得たのである。

次は自身の会社、ベガルタ仙台への説得だった。

「会社の状況を考えてみると、1週間でも齋藤課長やコーチたちがいなくなることは、他のスタッフの負担が増えることにつながる。だが、齋藤課長の熱心な話を聞いて、『やってみればいいじゃないか』と、クラブとして実行することを決断した」と語るのは、ベガルタ仙台の白幡洋一代表取締役社長だ。

実は白幡社長には株式会社リコー

勤務時代に、スポーツの価値を感じるこんな原体験があった。「24歳の時に台湾へ派遣され、繊維工場の運営管理業務に従事していたが、現地従業員の定着率が悪いのが悩みだった。台湾はバスケットボールが国技。私はバスケットボールには明るくなかったが、学生時代にバレーボールをしていたこともあり、日本から持って行ったボールを使って、休日にバレーボールを教えるようにした。すると、徐々に参加人数が増え、彼らもいつしかバレーボールを楽しむようになってコミュニケーションが増したことで、必然的に定着率も高まった」(白幡社長)。

08年に仙台市の元副市長から、「宮城県にゆかりがあり、会社の経営経験とスポーツに対する理解があり、勘の働く人」という条件を基に、当時、東北リコー株式会社の社長であった白幡氏に白羽の矢が立てられ、ベガルタ仙台の社長へと招聘された。就任当初はサッカーの知識はほとんどなかったという白幡社長だが、それでもスポーツの持つ力は身をもって感

サッカーは世界の言葉

～Jクラブの草の根国際交流～

じていた。

「日頃うちのコーチたちはベガルタ仙台というブランドに守られ、恵まれた環境で指導を行っている。海外、それも先進国ではなく開発途上国で子どもたちにサッカーを教えるということは、自分自身で指導方法を工夫しなければならず、その経験自体が彼らの人間形成の上で必ずプラスになるはずと考えた」と白幡社長は語る。

自身の台湾でのかけがえのない経験もあり、コーチたちの人間教育にも間違いなく有益になると想いから、今回のエチオピアへのコーチ派遣にクラブとしても全面的に取り組むことになった。

派遣プロジェクトの実現に向けて

早速、新妻理事長と齋藤課長を中心に、派遣プロジェクトの実現に向

て各所への調整が進められた。齋藤課長は、「自らの過去の経験から、ある程度の成果を上げる自信はあった。不安や迷いがあれば、実現できなかつたこと。会社に直談判する上で、フー太郎の森基金がJICA（独立行政法人国際協力機構）とも協力関係にあり、外務大臣表彰を受けた信頼のおけるNPOであることも追い風になった」と背景を振り返る。

2人は早速、JICA東北を訪れて協力を要請した。これに対して、「2004年よりJICAは草の根技術協力事業を通じてフー太郎の森基金と協力関係にあり、その活動に関する情報は得ていた。われわれはJICAの予算が開発途上国でどのように活用され、現地の人々にどれだけ貢献しているのかを納税者に説明する義務がある。その意味でも、こうした地道な活動を多くの市民に知ってもらえるように、広



JICA東北 総務課長
(当時、現在は本部資金協力支援部)

石岡 秀敏 氏

報の側面から支援することは有益だと考えた」と語るのは、JICA東北の石岡秀敏総務課長（当時、以下同）だ。早速、地元テレビ局に打診したところ、KHB（東日本放送）が番組制作に名乗りを上げてくれた。

JICAとしても、「単なるODA（政府開発援助）に関する番組や新聞記事だけでは視聴者の発火点も低い。もっと気付きを与えるきっかけづくりが重要だった。その意味ではベガルタ仙台という地元の人たちにとって身近な存在のJクラブが、単にボールやウエアを



上:ベガルタ仙台のホームゲームでエチオピア産のコーヒーを販売し、コーチを派遣するための募金を呼び掛けた 右:エチオピアでの植林活動を伝え、コーチ派遣への協力をお願いするチラシも製作した



贈るのではなく、コーチたちが実際に現地の子どもたちと触れ合うという「目に見える形」での活動を行うことは、とても貴重なものだった」と石岡課長は語る。

KHBもディレクターとカメラマンだけではなく、音声スタッフも加えた3人態勢のクルーで現地入りし、活動を精力的に取材することを決めた。JICAによる取材クルーの派遣費サポートは2人までのため、スタッフ1人分の渡航費はKHBが自社で負担した。

このプロジェクトはファン・サポーターにも広く告知され、コーチの派遣費用については寄付を募った。ベガルタ仙台のホームゲームの際には、フー太郎の森基金がユアテックスタジアム仙台内にエチオピアでの植林活動を紹介するコーナーを作り、寄付金付きのエチオピア産コーヒーを販売して約50万円を集めた。このコーヒー販売の時に使用した紙コップには、ファン・サポーターから「エチオピアの子どもたちに笑顔を!」などのメッセージが書き込まれ、現地での植林の際に苗木のポットとして活用された。また、この企画を知った福島県の会社が50万円の寄付を申し出てくれたため、目標としていた100万円の募金が集まった。ベガルタ仙台の派遣コーチは、当初1人の予定だったが、業務負担の大きさを考慮して2人の派遣へと変更し、斎藤課長は自費で参加することを決めた。

また、フー太郎の森基金の本部がある福島県相馬市の少年サッカーチームの子どもたちには、エチオピアの子どもたちへのメッセージシートを

書いてもらった。テーマは、「2014年のワールドカップの時に、君がこうなついてくれたらうれしい」というもの。自分がこうなりたいではなく、エチオピアの友だちにどうなつていてほしいかを考え、願い、「古着のボールではなく、ちゃんとしたボールで僕たちとサッカーをしよう」「食べ物や水に困らない平和な国になって、楽しくサッカーができるようになってほしい」といったメッセージを寄せてくれた。同様に、エチオピアの子どもたちにも、日本の友だちへのメッセージを書いてもらい、ラリベラの大地にタイムカプセルを埋めることにした。「普段は考えもない遠く離れた国の子どもたちの幸せを、こうした取り組みによって家族や友だちと話し合ったり、自ら想いをはせて考えてみる、そうしたきっかけになれば」と新妻理事長は話す。

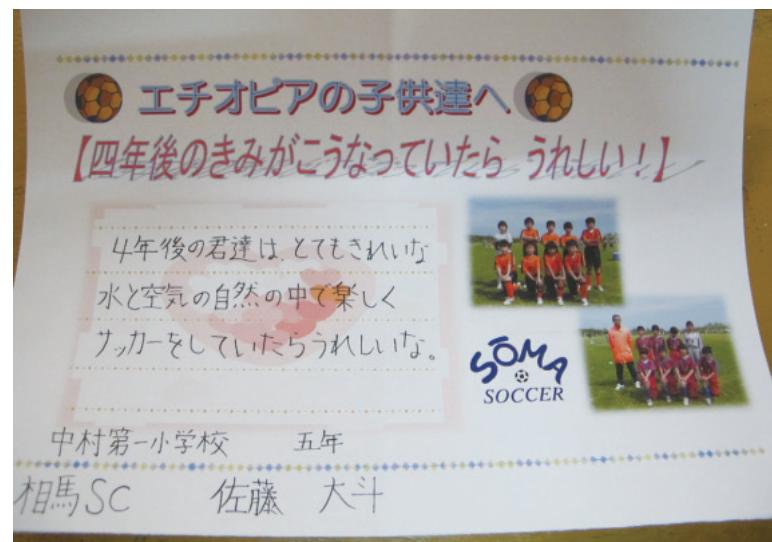
こうした、たくさんの人々の想いが重なり、今回の一大プロジェクトは実現していったのである。

同じ地球に暮らす仲間として

今回のプロジェクトは、参加したメンバーに新しい発見と大きな驚きを残した。

「当初は海外へ行くのであれば、ヨーロッパの先進クラブの育成組織を見た方が勉強になるのではと思っていた。だがエチオピアに行って、アフリカの子どもたちの身体能力の高さにあらためて驚かされると同時に、人の話を集中して聞けないといった彼ら特有の課題も見えた。こうしたアフリカの現状を理解できたのは現地に行ったからこそ。日本の子どもたちに今回の旅の話をすると、彼らもエチオピアがどんなところかと興味を持ってくれる。それは日本の子どもたちにとって、アフリカに関心を持つ初めの一歩になってくれると思う」(井上コーチ)。

「最貧国という過酷な環境で生きている彼らは、モノに対する欲求やゴー



日本の子どもたちからエチオピアの子どもたちへと送られたメッセージシート。遠い国に暮らす友だちの幸せを願う、たくさんの素敵なお手紙が寄せられた

サッカーは世界の言葉

～Jクラブの草の根国際交流～



コーチから贈られた初めて見る本物のサッカーボールを、子どもたちは大切そうにいつまでも抱えていた

ルに対する執着心がとても強い。そしてサッカーを純粋に心から楽しむ姿勢は、とにかく新鮮だった。日本の子どもたちや指導者が忘れがちな“サッカーはゴールを奪う競技である”という原点を、あらためて彼らから教えてもらったような気がする」(福田コーチ)。

「2人のコーチは、日本とはまったく環境も文化も異なるエチオピアの地でたくさんの驚きと出会い、サッカーを教えるということの奥深さを再認識し、白幡社長の狙い通り、まさに人間として多くのものを得て帰国した。そして、その体験を日々の育成普及活動において、仙台の子どもたちへと伝えていってくれることだろう。

「まずは継続することが重要だと考えている。しかし、いつまでどのような支援を行うのかをしっかりと決めていくことも大切。ただサッカー教室をしているだけではいけない。一番大事なことは彼らの自立。現地でいかに子どもを指導する指導者を育成していくかを考えることも大切なテーマになる。また、クラブだけがお金を出すのではなく、ファン・サポートの人たちにもこの活動の趣旨や想いを理解していただき、募金活動などを通じてエチオピアの現状を知ってもらうことにも意味

がある。そのためにも2年に1回の派遣が望ましいだろう。この活動を単発での国際貢献ではなく、地元地域と連携した活動にしていきたい」と白幡社長は、これからベガルタ仙台としての支援の考え方を語る。

「今回のプロジェクトで、サッカーというのはこんなにも子どもたちを幸せにする力があるのかと、本当に驚いた。サッカー教室を通して、子どもたちと今までと違った触れ合い方ができたことは大きな財産。われわれのエチオピアでの支援もいつかは終え、彼らが自分たちで緑の大地を守っていけるようにしなくてはならない。その時まで、植林やサッカーの活動を通して彼らとしっかり向き合っていきたい」と、新妻理事長も現地の人々の自立を願う。

今回の約1週間のエチオピア滞在の中で、ラリベラからラバにまたがつ

て片道4時間という、標高3200mを超えるカンカニという土地を訪れた。へき地で今まで学校がなく、先生も来なかった子どもたちのために、フー太郎の森基金が小学校を建設した場所だ。建設費用は約10万円。この学校によって子どもたちの人生は大きく変わることだろう。そして、今回はサッカーを通して彼らに夢を届けることができた。「いつかエチオピア代表になって、日本代表と試合がしたい」。そう話す子どもたちの目には、厳しい現実の中でも確かに前を向いて生きていく力があった。

同じ地球に生きる仲間として、自分たちにできることは何か、そして彼らが自立していくために必要なことは何か。今回のプロジェクトで得た多くの財産を生かし、この大きなテーマに向けて、ベガルタ仙台とフー太郎の森基金の連携活動が初めの一歩を踏み出したことは間違いない。



カンカニの子どもたちと、フー太郎の森基金が建設した小学校の前にて。いつの日か彼らの中からエチオピア代表選手が生まれ、日本代表とワールドカップで対戦する時が来るこ



浦和レッズ

～アジアとの懸け橋を目指して～

「コラッ！ しっかり並べ!!」

UAE（アラブ首長国連邦）のドバイにあるグラウンドに、

日本語の太い大きな声がこだまする。

声の主は、浦和レッズ・ハートフルクラブの落合弘キャプテンだ。

浦和レッズのハートフルクラブとは、サッカーの普及を柱とし、

「こころ」を育むことをテーマにした地域におけるコミュニケーション活動のこと。

2005年以降は、ホームタウンのさいたま市における活動だけではなく、

アジアの子どもたちとサッカーを通じた「草の根国際交流」も進めている。

さいたまからアジアへ

「スポーツは、体を鍛え、テクニックを磨くだけでなく、人々の“こころ”をも鍛える。相手に立ち向かう強い精神力と集中力、チームメートを信頼する“こころ”や“思いやり”が大切だからだ。中でもサッカーは、みんなで一つのボールを追い掛け、ゴールを目指す単純なスポーツ。パスという“コミュニケーション”を通じ、ゴールという“夢”に向かい、イレブンや応援する人の“こころ”を一つにする。Jリーグ発足以来、浦和レッズを支えてくれたさいたまの人々とともに、サッカーを通じた多くのコミュニケーションを実現する活動が『ハートフルクラブ』である」と落合キャプテンは説明する。

一般的なハートフルクラブの活動は次のようなものだ。まず午前中は幼稚園や保育園の訪問、小学校の授業サポートに当たる。小学校の授業では、

1時間目に道徳に当たる時間を持ち、2時間目以降はサッカーの実技。もちろん男女にかかわらずプレーする。当然サッカーが得意ではない子どもも多いが、落合キャプテンは「恥ずかしがらずに大きな声を出すこと、そして友だちへの思いやりを持つことが一番大切だと、いつも子どもたちに伝えている。

午後になると、「ハートフルスクール」と呼ばれる子ども向けのサッカースクールを行う。ハートフルクラブに所属するコーチ8人を4人ずつ2組に分け、希望があった学校を訪問していく。このほか、年齢制限なしのスクールである「ハートフルキャラバン」や、「ハートフルトーク」と呼ばれる落合キャプテンの講演活動など、さまざまなプログラムがある。「それが1年間、ほぼ毎日のように続く」と説明するのは、ハートフルクラブを統括する普及部の辻谷浩幸課長である。

こうしたホームタウンのさいたま市の活動をベースとしながら、プロジェクトの一環として、「浦和レッズ・ハートフルサッカー in ASIA」と呼ばれる国際交流活動が実施されているのである。

スマトラ沖地震が契機に

04年12月26日、インド洋に浮かぶインドネシアのスマトラ島沖でマグニチュード9.1の大地震が発生した。死者・行方不明者22万人超、負傷者13万人超を数え、現地の暮らしはもちろ



浦和レッズ ハートフルクラブ
キャプテン

落合 弘 氏

サッカーは世界の言葉

～Jクラブの草の根国際交流～



落合キャプテンはどの国の人たちにも「恥ずかしがらずに声を出して元気に楽しむこと、友だちを思いやる気持ち」の大切さを伝えている

ん、周辺の国々を含めて大きな爪痕を残した。

05年7月、当時タイ航空がクラブのパートナーだったこともあり、この地震の影響を受けたタイを元気にするプロジェクトとして、浦和レッズ・ハートフルクラブはその活動をタイのプーケット島に移して実施した。「国が違う、言葉が違う、宗教や文化が違えども、サッカーを通して、ボールを追う子どもたちの“こころ”はつなげられることを証明してきた」と落合キャプテンはその手応えを口にする。

07年、トップチームがAFCチャンピオンズリーグへの出場を果たした際、試合に先駆けて対戦相手の国を訪問してサッカー教室を開いた。これを機に、アジア諸国の草の根国際交流を図るべく、以降は韓国、中国、インドネシア、タイ、UAE、マレーシア、シンガポール、バングラデシュ、香港、台湾など、これまで延べ18カ国で、5000人以上の子どもたちと接してきた。

国内同様、1回の遠征につき4人のコーチを1グループとして派遣。主に

開催国の小学校、現地の日本人学校の小学生を対象に、約2時間のサッカー教室を開催する。1回の派遣につき、5~6回のセッションを実施するため、「コーチ陣にとってはかなりのハードスケジュールとなるが、派遣する以上はできる限り大きな成果を残して帰ってきたいという想いがある。コーチたちにとってもいい経験になるので頑張ってもらっている」と辻谷課長は語る。

文化の違いを理解した上で レッズ流を貫く

海外でのこうした活動の難しさは、言語が違うことはもちろんのこと、なんといっても文化や習慣、宗教などが大きく異なる点にある。

UAEのドバイで実施した時のこと。「並べ！」と言っても列に並ばない、バスを配れば勝手に子ども同士で交換してしまう。落合キャプテンによれば「サッカーの技術レベルは決して低くないが、とにかく子どもたちが言うことを聞かないので苦労した」。ただ、子

どもに集中力がないことには現地の大人たちもかなり苦労しているらしく、「子どもたちを怒鳴りながら指導し、少しずつ彼らがまとまっていく姿を見ていた王族から『おまえは伝道師なのか?』と真顔で聞かれた」(落合キャプテン)という逸話が、産油国における教育の難しさを物語っている。

しかし、UAEの全てのチームが同じというわけではなかった。翌日、アブダビの会場で開講してみると、同じ世代の子どもたちなのに、こちらは見事に統率がとれていた。「実はトップチームはドバイよりもアブダビが圧倒的に強い。こうしたクラブの強さは、育成組織の教育にまで影響しているのだと、この時あらためて実感した」(同)。

こんな出来事もあった。グラウンドに飲み終えたペットボトルを捨てたまま帰ろうとする子どもたちに違和感を覚え、捨てる片付けようとすると、現地のスタッフから「捨わないでほしい。それを片付けることを仕事としている人がいる。彼らの仕事を奪わないでほしい」と注意された。

各国の文化や風習の違いから、エピソードには事欠かない。中国では、一人っ子政策の影響もあり甘やかされて育てられているのか、スパイクのひもがほどけるとコーチに足を差し出して結んでもらっているシーンを見掛けた。サッカーも総じてあまり上手ではない。子どもだけでなく、保護者と指導者にクリニックの内容について説明している時に、聞いていた保護者が大声で携帯電話でけんかを始めてしまうこともあった。落合キャプテンが「ああいう大人になってはいけない

のです」と話したところ、他の保護者の浦和レッズを見るまなざしが変わった。

バングラデシュでの歓迎ぶりも、また一味変わったものだった。炎天下の中、歓迎する村長の話が長時間に及んだ。聞いている子どもたちの目もうつろ。だが長く話すことこそが、彼らの文化においては歓迎の気持ちの表し方だったのかもしれない。「しかし、プレーする子どもたちのことを最優先に考え、以後はあいさつも短くしてもらうようお願いしている」(落合キャプテン)という。

インドネシアでは、現地に住む日本人と、地元の子どもたちを交ぜてサッカー教室を開講した。現地の子どもたちは日本人と試合をするのだからと、借り物のスパイクを履いてきたようだった。しかし、その多くは古く破れていた。落合キャプテンはその時の様子をこう振り返る。「気が付けば、現地の子は借り物のスパイクを脱ぎはじめ、はだしになってプレーしていた。日本人の子どもたちは、はだしの相手に最初はちゅうちよしていたが、いつの間にか気にせず互いに真剣にプレーするようになっていた。恥ずかしがる素振りも見せず、明るく無邪気にサッカーを楽しむ現地の子どもたちの笑顔とはじけぶりは、本当に感動的だった。」

初めは文化の違いに戸惑った部分も大きかったというが、落合キャプテンはこうした各国での体験を踏まえ、サッカーの指導については常にレッズスタイルを貫き通すことに決めた。どの国に行っても日本の子どもたちと同じように向き合い、怒ることが必要な時には大声で怒る。つまり「現地の文



さまざまな国の文化に触れることのできる海外でのサッカー教室は、浦和レッズのコーチたちにとっても他では得られない貴重な経験の場になっている

化に指導スタイルを合わせるのではなく、日本での指導スタイルをしっかりと伝え、その上で相手の文化との違いを認識する、それこそが眞の文化交流につながる」(落合キャプテン)と考えるに至ったからだ。

こうした背景には、浦和レッズがアジアチャンピオンとなり、FIFAクラブワールドカップに出場したことや、日本代表がFIFAワールドカップ出場の常連国となった影響もある。落合キャプテン自身も、「アジアナンバーワンクラブになった浦和レッズのコーチであること、そして現役時代に日本代表のキャプテンを務めていたということで、アジアのどの国に行ってもとても高い注目度と尊敬の念を集めている」と実感している。

三菱商事とFOUNAPの支援を得て

このアジアにおける「浦和レッズ・ハートフルサッカー in ASIA」は、09年以降、三菱商事株式会社がサポートカンパニーとして支援してい

る。日本の強みを発揮するこの活動の意義を理解するとともに、アジア各の駐在員や現地の関係会社に対するCSR(企業の社会的責任)活動としての位置付けもある。

また同年には国連機関の一つ、国連の友Asia-Pacific(略称はFOUNAP)との提携も結んだ。FOUNAPは「平和、人権、環境」という国連の理念を広く世界に啓発することを目的に、国連と民間の懸け橋になっている団体だ。

アジアにおける活動だけでなく、ハートフルクラブやレッズランドなど、浦和レッズの活動を総合的に支援することになり、現在はトップチームのユニフォーム、ハートフルクラブで指導するコーチのウエアやスクールで使用するビブス、子どもたちのウエアなどにもFOUNAPのロゴがプリントされている。

「地域に根差し、その上で国際交流を推進する活動は、Jクラブである以上、継続していくかなくてはならないと思う。三菱商事やFOUNAPといった企

サッカーは世界の言葉

～Jクラブの草の根国際交流～

業や団体が浦和レッズの活動を理解し、支援してくださることは大変ありがたい。それゆえ、われわれが現地で得た知見や体験を持ち帰り、地域に還元する必要がある。われわれは活動による成果を残すと同時に、活動や経験を報告し、広く伝えていく義務がある」と落合キャプテンは語る。

国際経験を地域へ還元する

「ハートフルクラブの活動の狙いのひとつは“非日常を提供すること”。埼玉スタジアム、レッズランド、スクール、クリニック…。こうしたすべてが子どもたちや取り巻く大人にとって、非日常の場になる。海外の体験もその一つ。海外に行くことで、コーチやスタッフも日本や日本人の良さをあらためて知ることができる。こうした経験をまた地域

に還元し、子どもたちに他の国のこととも知つてもらい、彼らの人間教育にも役立てていきたい」(落合キャプテン)というのがクラブの想いだ。

浦和レッズのクラブ内では「グローバル」という言葉が使われるという。グローバルとローカルを掛け合わせた造語である。この言葉のように、地域での地道な活動と国際的な貢献活動の両輪を大切にする浦和レッズの「ハートフル」な活動は、さいたまとアジアの子どもたちにたくさんの笑顔をこれからも生み出していくことだろう。

* * *

Jリーグ設立から20年の時がたち、その理念の一つである「国際社会における交流及び親善への貢献」の実現に向けて、各クラブはさまざまな活動を模索しながら行ってきた。

今回の取材を通して、こうした活動は相手国への単なる国際貢献ではなく、Jクラブにとっても他では得られない貴重な体験の場であり、大切な学びの機会でもあることが分かった。



落合キャプテンは日本での指導と同様に、どの国の子どもたちに対しても礼儀を重んじる厳しさと大きな愛情で接し、サッカーの楽しさを伝えている

世界中で多くの人々に愛され、広く普及しているサッカーは、まさに世界の“共通言語”といえる。しかし、ボールやユニフォームなどを贈ることだけが支援活動ではないということは、今回の二つのクラブの活動を見ても明らかである。開発途上国の中には「支援慣れ」てしまっている国もあり、「モノ」だけを与えるのでは、彼らの自立を妨げることにもつながる。やはり、人と人との触れ合いの中にこそ、真の国際交流があるのではないだろうか。

海外での普及活動は、渡航費などの金銭面や、その間コーチが不在になることなどを考えると、クラブとして二の足を踏みがちな活動ではあるだろう。しかし、ベガルタ仙台も浦和レッズも、貴重なきっかけを逃さず決断し、大きな一步を踏み出した。そしてクラブの独力ではなく、NPOや国際協力機関と協働し、スポンサー や サポーターの支援を得られるように努力を重ね、実施に向けての環境をつくるその“行動力”によってこうした活動は実現してきた。

まずはホームタウンを中心に日本のサッカー文化をしっかりと育み、それを海外にも広め、また海外で得た多くの知見をホームタウンへと還元していく。これも地域に根差すJクラブの存在意義の一つであり、Jリーグの理念のもとに、これから果たしていくべき役割だといえるだろう。

